



Title	訓詁学研究ノート(2)
Author(s)	福満, 正博
Citation	明治大学教養論集, 293: 145-161
URL	http://hdl.handle.net/10291/5095
Rights	
Issue Date	1997-01-31
Text version	publisher
Type	Departmental Bulletin Paper
DOI	

<https://m-repo.lib.meiji.ac.jp/>

訓詁学研究ノート (2)

福 満 正 博

本稿は筆者の基礎研究の一つで、前稿「訓詁学研究ノート (1)」の続きである。訓詁学関係の重要な研究を概説するのが目的で、これはその音韻編の一部である。

(4) 『上古音韻表稿』 董同龢著

(1948年重印, 中央研究院歴史語言研究所單刊甲種之二十一)

董同龢の『上古音韻表稿』を一読して理解することは、なかなか困難である。まず Karlgren の上古音学説を知っていなければならないし、上古音をめぐる Karlgren と李方桂の論争の過程も知っていなければ、気付かないことが少なくないからである。Karlgrén と李方桂の論争は、学説史上から見て上古音の再構という課題が、中国音韻学を代表する二人の大家によってどのようにしてできたのかを知るという意味で興味深いものであるが、同時に学問として一つの学説の成立が誤りと修正をくり返す決して平坦な道でないということを見ることができるといっても面白いものである。董同龢は二人の論争と直接関係はないのだが、そこから生まれたと言ってよい程、本書にその成果をよくとり入れている。

Karlgrén も、中古音の再構を一応終わっての後 (1915~1926, “Études sur la phonologie chinoise”), 上古音の再構を完成させるまでは (1940, “Grammata Serica”)⁽¹⁾, それなりに長い時間を必要としたようだ。その間少なくない論争が行なわれている。もちろん李方桂以外にも “Tibetan and Chinese”⁽²⁾では、Simon や Dragunov などの説を批判しながら吸収するとい

う Karlgren 特有のやり方でとり挙げている。しかしその主なものといえ
ば、李方桂であろう。

Karlgren ですら初期の “Problems in Archaic Chinese” (P. 805)⁽³⁾におい
て、上古の之部の「来」「久」等の字が「福」等の入声字と押韻するのは韻
尾に -g があるからだとだけ説明して、押韻の条件としての主母音の一致に
ついては全く考慮に入れていなかったのである。これについて「切韻 \hat{a} 的来
源」⁽⁴⁾で李方桂に批判される。また “Shi King Researches” (P. 128)⁽⁵⁾におい
ては、清朝考証学の江有誥以来の東部と中部を分部するという成果をふまえ
ずに両部を混同して再構し、李方桂の “Ancient Chinese, -ung, -uk, -uong,
-uok, etc in Archaic Chinese”⁽⁶⁾を見てから、自説を “Word families in
Chinese”⁽⁷⁾で修正するのである。

李方桂も「切韻 \hat{a} 的來源」において上古 \hat{a} 音に起源する韻として唐韻（陽
部）、鐸韻（魚部入声）を挙げながら、何故か対応する魚部陰声所属の韻を
検討せずに豪韻（幽部、宵部）を挙げるということをしている。これは自ら
批判した Karlgren の “Problems in Archaic Chinese” (P. 808) の「高
kâg > kâu」等の再構から影響を受けているのだろう。また “Ancient
Chinese” (P. 395~405) で、主母音の広狭について幽部が奥舌の狭、侯部
が奥舌の半、宵部が奥舌の広として長い説明を加えていたのに、“Word
families in Chinese” (P. 49) で Karlgren から詩経の例外的押韻で幽部と宵
部がよく通押する事例と矛盾すると指摘されると、“Archaic Chinese *
jwəng, *jwək and *jwəg” (P. 66, 注 1)⁽⁸⁾ではあっさり自説を否定して
Karlgren の説を受け入れている。

このように挙げたのは、決して二人をおとしめる為ではなく、両大家をし
ても上古音の再構がどれ程の曲折に満ちた過程であったかを示したかったの
である。Karlgren と李方桂との論争は、相手からの批判を受け入れて修正
しながら自説を深めていくという形で実りある論争であったと言えるだろ
う。

しかし最後まで二人が譲らなかったのが、之蒸部に属する中古の東₃・屋₃・尤韻の再構問題であった。李方桂が之部の蒸韻に合口が存在しないことを主な根拠に之蒸部の東₃・屋₃・尤韻を **-juəŋ*・**-jwǝk*・**-jwəŋ* (“Archaic Chinese” P. 70) として [-ə-] を主母音とするのに対し、Karlgren は主母音 [-u-] にあくまで固執し東₃・屋₃・尤韻をそれぞれ **-jǔŋ*・**-jǔk*・**-jǔŋ* とした。“Compendium of phonetics in Ancient and Archaic Chinese” (1954)⁹⁾でも変えていない。これは上古の之蒸部が咍(灰)皆之・徳麥職・登耕蒸という中古韻系列と、侯尤・屋₃・東₁東₃という中古韻系列との二系列に相当することに由来している。Karlgren の -jǔ- という再構はどうしても強引すぎるくらいがあり (“Word families in Chinese” P. 51), 後に董同龢が批判するように諧声系列から考えても、-u-音に固執せねばならない理由はないだろう。しかし李方桂においても、唇音声母という条件で、**-jwəŋ* が上声の場合は中古の -əu (侯韻) に、平・去声の場合は -uâi (灰韻) に分岐するという説を、後の「上古音研究」では自ら放棄したようだ。

董同龢の創見になる上古唇音声母中の「清音的唇鼻音 m-」も、自ら述べるようにこの灰韻と侯韻の分岐をめぐる論争の最中、Karlgren が「海 **xmag > xâi*」 (“Word families in Chinese” P. 43) と述べたことから始まったのである。したがって「上古音韻表稿」は二人の論争の副産物と言える所がある。それがこの本の読みにくさになっている。

さて、董同龢の上古音の声母の再構は次の通りである。

唇	音:	p	p'	b'	m	ɱ
齒	音:	t	t'	d	d'	n
齒 茎	音:	ts	ts'	dz'		s z
齒茎硬口蓋	音:	t̂	t̂'	đ'	ń	ś ẑ
硬口蓋	音:	k̂	k̂'	ĝ'	gn	ǰ j
軟口蓋	音:	k	k'	g	g'	ng x ɣ
声 門	音:	ʔ				

上古声母と中古声母の対応は次のようである。

唇音声母

$$*p-, *p'-, *b-, *m- \rightarrow p-, p'-, b-, m-, \quad *m- > x-$$

同じ諧声系列で、曉母 $x-$ と明母 $m-$ が同時に現われることが多い。しかも $m-$ と $k-$ が交互に現われることもあり複声母 $xm-$ ではなく、 $x-$ と $m-$ に分岐し得る一つの声母として無声声母 $*m-$ を設定する。

舌音声母

$$*t-, *t'-, *d-, *n-, *l- \begin{cases} \text{I・IV等韻} & \rightarrow t-, t'-, d'-, n-, l-, \\ \text{II・III等韻} & \rightarrow \hat{t}-, \hat{t}'-, \hat{d}'-, \hat{n}-, \hat{l}-, \end{cases}$$

$$*d- \rightarrow \bigcirc-(\text{喻}_4)$$

董同龢の \hat{t} は齒莖硬口蓋音 $[\hat{t}]$ のことである。以下同様。舌上音 \hat{t} -系声母が上古の舌頭音 $*t$ -系に帰することは、清朝錢大昕(『十駕齋養新録』)より言われて来たことである。

喻₄声母について、Karlgren は $*d-$, $*g-$, $*z-$ の三つの上古声母に由来しているとした。董同龢は、喻₄声母が諧声する z -等の齒頭音 ts -系声母はほぼⅢ等韻に限られるので、 $*z-$ は不必要とする。従って喻₄声母については、 $*d- > \bigcirc-(\text{喻}_4)$, $*g- > \bigcirc-(\text{喻}_4)$ とする。また喻₄声母の中には、牙喉音声母 k -系と齒頭音声母 ts -系とに共通して諧声するものがあり、 $*gd$ -域は $*gz$ -のような複声母の可能性もあるとする。

$$\left. \begin{array}{l} * \hat{t}-, * \hat{t}', * \hat{d}', * \hat{n}, * \hat{s}, * \hat{z} \\ * \hat{k}-, * \hat{k}', * \hat{g}', * \hat{gn}-, * \hat{x}-, j- \end{array} \right\} \rightarrow ts-, ts'-, dz'-, \hat{n}s-, \hat{s}-, \hat{z}-$$

正齒音Ⅲ等 ts -系を、上古声母 $*\hat{t}$ -系に帰すのは Karlgren と同じである。これとは別に董同龢は、正齒音Ⅲ等 ts -系が牙喉音 k -系と諧声し、舌音 \hat{t} -系とは諧声しない諧声系列を挙げる。これらの諧声字の中にはⅢ等韻でないものも多くあるので、口蓋化 (palatalization) の可能性を否定する。そして硬口蓋音(「部位偏後的舌面音」)の系列として $*\hat{k}-, * \hat{k}', * \hat{g}', * \hat{gn}-, * \hat{x}-, j-$ を設定し⁽⁹⁾、これが中古正齒音Ⅲ等声母となったする。

これは私見であるが、諧声は合口介母 $-u-$ の有無つまり合口と開口につい

て比較的厳格に区別されるのに対し⁽¹⁾、拗音介母-i類の有無についてはこれと無関係に自由に通転するという特徴がある。董同龢が*k-系と認定した字について、李方桂も後に「幾個上古聲母問題」で*krj->ts-等のように解釈し直したように(後述)、これらの現象は口蓋化によっても説明できるように筆者には思われる⁽²⁾。

常母z-は(邪母z-も含めて)、Karlgrenは*d̂->z-(*dz->z-)としていたが、これを否定し上古より有声摩擦音として存在していたとする。

齒音声母

$$*ts-, *ts'-, *dz'-, *s-, *z- \begin{cases} \text{I} \cdot \text{III} \cdot \text{IV} \text{等韻} & \rightarrow ts-, ts'-, dz'-, s-, z- \\ \text{II} \text{等韻} & \rightarrow \begin{cases} \text{II} \text{等韻} \\ \text{III} \text{等韻} \end{cases} \left. \vphantom{\begin{cases} \text{II} \text{等韻} \\ \text{III} \text{等韻} \end{cases}} \right\} ts-, ts'-, dz'-, s-, z- \end{cases}$$

齒上音 ts-系について董同龢は興味深い分析をしている。Karlgrenは ts-系について齒頭音 ts-系との関係を認めたが、ts-系の所属がII等韻とIII等韻に分かれるので、結局実際にはII等韻の ts-系を上古の *ts-系に帰し、III等韻の ts-系を上古の *ts-系に帰していた。董同龢はこれを統一的に説明することを試みたのである。

中古音の ts-系の字の所属を上古韻部にさかのぼって調べてみると、次のような結果が得られるようである。

- (1) 上古主母音の広い祭歌元部・葉談部・宵部と、魚陽部の麻陌庚韻系では ts-系が中古II等韻に入る。但し侯部入声と東部は本来主母音が-uであるが、後に江韻の主母音が u>â>a と変化したように、ts-系が中古II等韻に入る。
- (2) 上古主母音が半広狭の之蒸部・幽中部・微文部・緝侵部と、魚陽部の魚藥陽韻系では ts-系が中古III等韻となる。また侯部陰声も同様である。
- (3) 上古主母音の狭い脂真部・佳耕部では、平入声で ts-系が中古II等韻に入り、上去声で ts-系が中古III等韻に入る。

つまり、上古II等の主母音が原因で、声母が *ts->ts-と中古までに変化

し、条件によってそれが中古Ⅱ等韻に残ったものと、中古Ⅲ等韻に移ったものに分かれたと考えるのである。

但し、上記(1)(2)(3)が、音声上の変化の真の分化の条件と認められるかについては、必ずしも肯定的でない評価もある⁽¹³⁾。

牙喉音声母

*k-, *k'-, *g'-, *ng-, *x-, *ʔ- → k-, k'-, g-, ng-, x-, ʔ-

*ɣ- { I・II・IV等韻 → ɣ-
III等韻 → j-(喻₃)

*g- → ○-(喻₄)

Karlgren は上古声母 *g'-が I・II・IV等韻では中古匣母 ɣ-となり、III等韻でのみ群母 g'-として残ったとした。董同龢はこれを否定し、曉母・匣母共に上古よりの摩擦音とする。

ほかに複声母については、*pl-・*tl-・*kl-や *kt-, *ks-, *kp-, *mp-, *nt-等の可能性を示す。

董同龢の上古韻の再構は次の通りである。但し、前稿と同じく丁邦新の『魏晉音韻研究』(1965, 中央研究院歴史語言研究所專刊之六十五)にまとめられたものを利用し、多少手を加えた。

上古韻分部 (I)	(II)	(III)	(IV)
陰……………âg(吟), uâg(灰), 之……………uâg(侯)	əg(皆), uəg	jəg(之), juəg(脂合), juǎg(尤)	
入……………âk(德), uâk	ək(麥), uək	jək(職), juək, juǎk(屋 ₃)	
蒸……………âng(登), uâng, uâng(東 ₁)	əng(耕), uəng	jəng(蒸), juəng, juǎng(東 ₃)	
幽……………ôg(豪)	og(肴)	jog(幽), jǒg(尤)	iog(蕭)
入……………ôk(沃)	ok(覺)	jok(屋 ₃)	iok(錫)
中……………ông(冬)	ong(江)	jong(東 ₃)	
宵……………ôg(豪)	og(肴)	jog(宵 _A), jǒg(宵 _B)	iog(蕭)
入……………ôk(沃, 鐸)	ok(覺)	jok(藥)	iok(錫)
侯……………ôg(侯)	(ug)(虞)	jug(虞)	
入……………ôk(屋 ₁)	uk(覺)	juk(燭)	

上古韻分部 (I)	(II)	(III)	(IV)
東…………… <i>ung</i> (東 ₁)	<i>ung</i> (江)	<i>jung</i> (鍾)	
陰…………… <i>ag</i> (模), <i>uag</i>	(<i>ag</i>), <i>ǎg</i> (麻 ₂),	<i>jag</i> (魚), <i>juag</i> (虞),	
魚……………	<i>uǎg</i>	<i>jǎg</i> (麻 ₃)	
入…………… <i>ak</i> (鐸), <i>uak</i>	(<i>ak</i>), <i>ǎk</i> (陌 ₂),	<i>jak</i> (藥), <i>juak</i> ,	
	<i>uǎk</i>	<i>jǎk</i> (陌 ₃ , 昔)	
陽…………… <i>ang</i> (唐), <i>uang</i>	(<i>ang</i>), <i>ǎng</i> (庚 ₂),	<i>jang</i> (陽), <i>juang</i> ,	
	<i>uǎng</i>	<i>jǎng</i> (庚 ₃), <i>juǎng</i>	
佳……………	<i>eg</i> (佳), <i>ueg</i>	<i>jeg</i> (支), <i>jueg</i>	<i>ieg</i> (齊), <i>iueg</i>
陰……………	<i>ek</i> (麥), <i>uek</i>	<i>jek</i> (昔), <i>juek</i>	<i>iek</i> (錫), <i>iuék</i>
入……………	<i>eng</i> (耕), <i>ueng</i>	<i>jeng</i> (清), <i>jueng</i> ,	<i>ieng</i> (青), <i>iueng</i>
耕……………		<i>jěng</i> (庚 ₃), <i>juěng</i>	
歌……………	<i>a</i> (麻 ₂), <i>ua</i>	<i>ja</i> (麻 ₃), <i>jǎ</i> (支),	
陰…………… <i>a</i> (歌), <i>ua</i> (戈)		<i>juǎ</i>	
陰…………… <i>ad</i> (泰), <i>uad</i>	<i>ad</i> (夬), <i>uad</i> ,	<i>jæd</i> (祭 _A), <i>juæd</i> ,	<i>iæd</i> (齊), <i>iuæd</i>
祭……………	<i>æd</i> (皆), <i>uæd</i>	<i>jad</i> (祭 _B), <i>juad</i> ,	
入…………… <i>at</i> (曷), <i>uat</i> (末)	<i>at</i> (轄), <i>uat</i> ,	<i>jǎd</i> (廢), <i>juǎd</i>	
	<i>æt</i> (黠), <i>uæt</i>	<i>jæt</i> (薛 _A), <i>juæt</i> ,	<i>iæt</i> (屑), <i>iuæt</i>
		<i>jat</i> (薛 _B), <i>juat</i> ,	
		<i>jăt</i> (月), <i>juăt</i>	
元…………… <i>an</i> (寒), <i>uan</i> (桓)	<i>an</i> (刪), <i>uan</i> ,	<i>jæn</i> (仙 _A), <i>juæn</i> ,	<i>iæn</i> (先), <i>iuæn</i>
	<i>æn</i> (山), <i>uæn</i>	<i>jan</i> (仙 _B), <i>juan</i> ,	
		<i>jǎn</i> (元), <i>juǎn</i>	
陰……………	<i>ed</i> (皆)	<i>jed</i> (脂 _A), <i>jued</i> ,	<i>ied</i> (齊), <i>iued</i>
脂……………		<i>jer</i> (支)	
入……………	<i>et</i> (黠), <i>uet</i>	<i>jet</i> (質 _A),	<i>iet</i> (屑), <i>iuet</i>
		<i>juet</i> (術)	
真……………	<i>en</i> (山)	<i>jen</i> (真 _A),	<i>ien</i> (先), <i>iuen</i>
		<i>juen</i> (諄)	
陰…………… <i>ǎd</i> (哈), <i>uǎd</i> (灰),	<i>ǎd</i> (皆), <i>uǎd</i>	<i>jǎd</i> (脂), <i>juǎd</i> ,	
微……………	<i>uâr</i> (戈)	<i>jǎd</i> (微), <i>juǎd</i> ,	
入…………… <i>ât</i> (沒), <i>uât</i>	<i>ât</i> (黠), <i>uât</i>	<i>juar</i> (支)	
		<i>jăt</i> (質), <i>juăt</i> (術),	
		<i>jăt</i> (迄), <i>juăt</i> (物)	
文…………… <i>ân</i> (痕), <i>uân</i> (魂)	<i>ən</i> (山), <i>uən</i>	<i>jən</i> (真), <i>juən</i> (諄),	<i>iən</i> (先), <i>iuən</i>
		<i>jǎn</i> (欣), <i>juǎn</i> (文)	
葉……………	<i>ap</i> (狎), <i>ep</i> (洽)	<i>jap</i> (葉 _A), <i>jep</i> (葉 _B),	<i>iep</i> (帖)
入…………… <i>ap</i> (盍), <i>Ap</i> (合)		<i>jǎp</i> (業), <i>juǎp</i> (乏)	

上古韻分部 (I)	(II)	(III)	(IV)
談……………am(談), Am(覃)	am(銜), em(咸)	jam(鹽 _A), jem (鹽 _B), jām(嚴), juām(凡)	iem(添)
緝…………… 陰……………uâb(灰) 入……………âp(合)	uab(皆) əp(洽)	juab(脂) jəp(緝)	iəp(帖)
侵……………âm(覃), uâm (東 ₁)	əm(咸)	jəm(侵), juəm (東 ₃)	iəm(添)

(合口韻については必要のない限り名称は省略した。A・Bは三等韻重紐A類・B類のことである。)

董同龢は Karlgren の上古韻分部の問題点として、次のことを指摘する。それは Karlgren の“Grammata Serica” の Class X と XI が、王念孫の第13部を受け、去・入声を-d尾、上平声を-r尾として分けたにすぎなかったということである。董同龢は、王力が「上古韻母系統研究」で試みた分部の基準を認め、これを改めて脂部・微部に分け、共に-d尾で統一した⁽⁴⁾。またこれが中古脂韻・真韻の重紐現象の起源となっていることを指摘する⁽⁵⁾。

Karlgren は魚部侯部陰声をそれぞれ開音節と-g尾の二つに分けていたが、董同龢はその境界が曖昧だとして-g尾に統一する。また歌部についても、Karlgren は-r尾と開音節とに分けていたが、その根拠が例外的だとして董同龢は開音節に統一する。

このように董同龢は上古韻分部・上古韻韻尾について Karlgren よりも更に精密化させ、論理的に一貫し徹底化させた。しかし逆に開音節が歌部一つだけということになり、これが不自然かどうかについては、評価の分かれる所であろう。

董同龢の各上古韻部の分析は詳細を極めている。特に諧声を使って、同じ上古韻部に所属する中古韻の系列化を行なうことに成功しているように思われる。例えば元部のII・III・IV等韻で、刪韻・仙韻重紐B類・元韻と、山韻・仙韻重紐A類・先韻との二つの系列に分かれることを証明している。

Karlgren のように、例えば上古文部に所属する真韻を諧声の裏付けなしに論理だけによって齒舌音声母と牙喉音声母の二つに分けるなどというような方法を取らないという点で⁽⁹⁾、一步深化していると言える。

薰同穌は同じ上古韻部の I 等と II 等韻の主母音の区別を「関」(grave, 抑音) と「開」(aigu, 鋭音) とし、I 等に [^] の記号を付ける。また I ・ II 等の重韻の区別を「緊」(tense) と「鬆」(lax) とし、[~] の記号の有無で表わしている。

上古韻の再構に使われた母音の体系は次の通りになる。

		û
		u
e, ě		ô
	â, â	o, ô
	ə, ă	î
æ	e	ɔ, ǒ
a, ă	A	ɑ

薰同穌の上古各韻部の主母音の広狭関係は、その Karlgren 批判にもかかわらず基本的に同じである。葉談部・魚陽部・宵部・祭元部・歌部が広、緝侵部・之蒸部・幽中部・微文部が半広狭、佳耕部・侯東部・脂真部が狭という様である。しかし、奥舌の母音が上図を見れば容易に理解できるように九個も発音し分けされていたことになり、ここに課題が残されたと言えよう。

- (1) Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities, 12
- (2) 1931, Toung Pao 28.
- (3) 1928, Journal of the Royal Asiatic Society.
- (4) 1931, 中央研究院歴史語言研究所集刊3-1.
- (5) 1932, Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities 4.
- (6) 1932, 中央研究院歴史語言研究所集刊3-3.
- (7) 1933, Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities 5.
- (8) 1935, 中央研究院歴史語言研究所集刊5.
- (9) 1954, Bulletin of the Museum of Far Eastern Antiquities 22.
- (10) IPA による音声表記は本書 P17の注(1)を参照。

- (11) 合口と開口については、王力も「上古韻母系統研究」(1937, 清華學報12-3原載)に「稍為研究漢語音韻的人, 都知道漢語上古音開合兩乎的界限頗嚴」と述べる。また河野六郎「諸声声符に見られる直拗交替に就いて」(1949, 『河野六郎著作集, 2』所収)も同様のことを述べている。
- (12) 小倉肇「上古漢語の音韻体系」(1981, 言語研究79) P37で, kj系として解釈し直している。
- (13) 林燾, 書評(1949, 燕京學報36期)。
- (14) 王力の「上古韻母系統研究」における脂微分部の基準は次の通りである。
 1. 「広韻」のⅣ等齊韻の字で江有誥の脂部に属するものは新しく脂部にする。
 2. 「広韻」のⅠ等咍灰韻とⅢ等微韻で江有誥の脂部に属するものは新しく微部にする。
 3. 「広韻」のⅡ等のⅡ等皆韻Ⅲ等脂韻で開口の字は新しく脂部に, 合口の字は新しく微部にする。
- (15) 薰同穌には別に「広韻重紐試釈」(1945, 中央研究院歴史語言研究所集刊13)がある。
- (16) “Grammata Serica” P22.

(5) 「上古音研究」 李方桂著

(1971年『清華學報』九卷一・二期合刊原載, 後に商務印書館から『上古音研究』1980, として刊行される)

李方桂は Karlgren との論争の後, 1945年に “Some old Chinese loan words in the Tai languages”⁽¹⁾で, タイ語の借用語の中に上古の陰声に有声子音-d 尾が存在した痕跡を論証する。その後しばらくこの問題から離れていたようだが1971年に発表したのがこの論文である。彼自身の研究の成果という側面もあるが, 60年代までに行なわれたほかの様々な上古音に関する議論の中で穏当なものを集めたという性格も兼ねている。

李方桂の上古音の声母の再構は次の通りである。

		清 次清 濁			清 濁		清 濁	
唇	音	p	ph	b	hm	m		
齒	音	t	th	d	hn	n	hl	l, r
齒	茎音	ts	tsh	dz			s	
軟	口蓋音	k	kh	g	hng	ng		
声	門音	•					h	
円唇軟	口蓋音	kw	khw	gw	hngw	ngw		
円唇	声門音	'w					hw	

軟口蓋音になぜ二系列あるのかという問題等の都合により、介音から説明する。

李方桂は拗音介母を $-j-$ とし、Ⅲ等重紐も認めA類を $-ji-$ B類を $-j-$ のように区別する。但し、Ⅳ等は直音であることは認めるが、上古音からの説明の簡便の為に $-i-$ 介音を設定する。特徴的なことは、合口介母としての $-u-$ を認めないことと、Ⅱ等韻に介母 $-r-$ を設定することである。

これはおそらく Yakhontov の説あたりから始まるものだろう。“Fonetika kitaiskogo yazyka i tysyacheletiya do n. e. (labializovannyye glasnyye), 漢語訳：上古漢語的唇化元音”⁽²⁾で、魚陽部・之蒸部・佳耕部の舌音齒音声母に合口が無いことを発見している⁽³⁾。唇音声母に本来開合口の区別が存在しないことは別にして、牙喉音声母には開口合口のペアとなる二系列が存在するのに、舌音齒音声母には開口の一系列しか存在していないのである。そこで Yakhontov は、上古の牙喉音声母に $*k-$, $*g-$, $*x-$ 等の系列と $*k^w-$, $*g^w-$, $*x^w-$ 等の唇音化された軟口蓋音の系列との二つを設けて上古音の再構を試みた⁽⁴⁾。従来諸声系列や詩経押韻に於いて、Ⅲ等の $-i-$ 類介母は何ら影響しないのに対し、開口と合口は比較的厳格に区分されることは知られていた。合口介母が牙喉音の唇音化声母の影響で後の時代に成ったもの考えるならば、上古の拗音介母と合口介母の性格の違いがよく説明できるのである。これは一つの有力な解釈と言えよう。李方桂が合口介母を認めないのはこの説を受けている⁽⁵⁾。軟口蓋声母に二系列あるのはその為である。

Yakhontov はまた“Consonant combination in Archaic Chinese, 漢語訳：上古漢語的複輔音声母”⁽⁶⁾で、来母 $l-$ がⅡ等韻とは結合しないことを発見した。従来 Karlgren や薰同穌は、Ⅰ・Ⅱ等韻の区別を主母音の違いとして説明して来た。李方桂は、Yakhontov の説を利用してⅡ等韻に $-r-$ 介母を設け、Ⅰ・Ⅱ等の主母音そのものは同じとした。 $-r-$ 介母によって舌上音声母と齒上音声母の発生も、容易に説明できるようになった。また喻₄母と邪母の共通して対応する上古声母としても、これを使うのである。r音が場合に

より、介音となり、声母となるのである。

薰同穌の創見である「清的唇鼻音 m 」, つまり李方桂の $*hm-$ も、単独では体系として不自然であったので $*hn-$, $*hng-$, $*hngw-$ $*hl-$, $*hw-$ 等の系列を設けている。

李方桂の上古声母と中古声母の対応は次のようである。

唇音声母

$*p-$, $*ph-$, $*b-$, $*m-$, $*hm-$ → $p-$, $ph-$, $b-$, $m-$, $x-$,

Ⅲ等介母は、後に軽唇音化したものを $-j-$ とし、軽唇音化しないものを $-ji-$ とする。

舌音声母

$*t-$, $*th-$, $*d-$, $*n-$, $*hn-$, $\left\{ \begin{array}{l} \text{Ⅰ等}(-\phi-) \\ \text{Ⅳ等}(-i-) \end{array} \right\}$ → $t-$, $th-$, $d-$, $n-$, $th-$,

$\left\{ \begin{array}{l} \text{Ⅱ等}(-r-) \\ \text{Ⅲ等}(-rj-) \end{array} \right\}$ → $t-$, $th-$, $d-$, $n-$, $th-$,

$*t-$, $*th-$, $*d-$, $*n-$, $*hn-$ {Ⅲ等(-j)} → $ts-$, $tsh-$, $dz-$ 或いは $z-$, $nz-$ 或いは $z-$, $s-$,

$*l-$ → $l-$ $*hl-$ $\left\{ \begin{array}{l} \text{Ⅰ・Ⅱ・Ⅳ等} \\ \text{Ⅲ等}(-j) \end{array} \right\}$ → $th-$
→ $th-$

介音 $-r-$ により舌上音 $t-$ 系が、介音 $-j-$ により正歯音Ⅲ等 $ts-$ 系が、共に舌頭音 $*t-$ 系から生まれたとするのである。李方桂は、船母 $dz-$ と常母 $z-$ を方言による区別とするので、 $*d+j > dz-$ 或いは $z-$ となる。

正歯音Ⅲ等 $ts-$ 系で、牙喉音声母の字とも諧声するものを、薰同穌は上古音で $*k-$, $*k'-$, $*g-$, $*gn-$, $*x-$, $*j-$ と再構した。李方桂はこれらの字を「上古音研究」では $*skj-$, $*skhj-$, $*sgj-$, $*sngj-$ 等の複子音として再構した。しかし後に「幾個上古聲母問題」で訂正して次のようにした⁽⁸⁾。

$*krj-$, $*khrj-$, $*gri-$, $*ngrj-$, $*hrj$ > $tsj-$, $tshj-$, dz 或いは $z-$ 或いは $ji-$
(喻₄), $nz-$, $s-$,

齒音声母

$$\begin{array}{l}
 *ts-, *tsh-, *dz-, *s- \left\{ \begin{array}{l} \text{I 等}(-\phi-) \\ \text{III 等}(-j-) \\ \text{IV 等}(-i-) \end{array} \right\} \rightarrow ts-, tsh-, dz-, s-, \\
 \left. \begin{array}{l} \text{II 等}(-r-) \\ \text{III 等}(-rj-) \end{array} \right\} \rightarrow tʂ-, tʂh-, dz-, ʂ-, \\
 *r- \left\{ \begin{array}{l} \text{I} \cdot \text{II} \cdot \text{IV 等} \\ \text{III 等}(-j-) \end{array} \right\} \rightarrow \begin{array}{l} ji-(\text{喻}_4\text{母}) \\ zj-(\text{邪母}) \end{array}
 \end{array}$$

介母-rにより齒頭音*ts-系から齒上音 tʂ-系が生まれたとするのである。

薰同龢は中古齒頭音 ts-系をそのまま上古声母 *ts-系として再構した。しかし、少数であるが牙喉音とも諧声するものは *ks-, *kz-等のように上古の複声母として認定していた。李方桂はこれらの字を *sk-, *skw-等の形の複声母に改めた。また判断基準は必ずしも明らかではないが、s を接頭 (prefix) にする一列の複声母を、中古齒頭音 ts-系に対応する上古声母としている。s を接頭にする上古声母と中古声母の対応を全て挙げると次のようである⁽⁹⁾。

$$\begin{array}{l}
 *st- \rightarrow s-, \quad *sth- \rightarrow tsh-, \quad *sd- \rightarrow dz-, \quad *sdj- \rightarrow zj- \\
 *sk- \rightarrow s-, \quad *skw- \rightarrow sw-, \quad *skh- \rightarrow tsh-, \\
 *sg- \rightarrow dz-, \quad *sgj- \rightarrow zj-, \quad *sgwj- \rightarrow zjw-, \\
 *sm- \rightarrow s-, \quad *smr- \rightarrow ʂ-, \quad *sm- \rightarrow s-, \quad *snj- \rightarrow sj, \quad *sl- \rightarrow ʂ
 \end{array}$$

尚、*skj- > tʂ- のような齒頭音 III 等 tʂ-系との対応は前頁で述べたように李方桂は後に訂正している。

牙喉音声母

$$\begin{array}{l}
 *k-, *kh-, *ng-, *x-, *h- \rightarrow k-, kh-, ng-, x-, h- \\
 *g- \left\{ \begin{array}{l} \text{I} \cdot \text{II} \cdot \text{IV 等} \\ \text{III 等}(-j-) \end{array} \right\} \rightarrow \begin{array}{l} y-(\text{匣母}) \\ gj-(\text{群母}) \end{array}
 \end{array}$$

*hng- $\left\{ \begin{array}{l} \text{ng- (疑母)} \\ \text{x- (曉母)} \end{array} \right.$

*kw-, *khw-, *ngw-, *w-, *hw-

$\left\{ \begin{array}{l} \text{I・II・IV等} \\ \text{III等(-j)} \end{array} \right\} \rightarrow \text{kw-, khw-, ngw-, } \bullet \text{w-, xw-}$
 $\left\{ \begin{array}{l} \text{III等(-j)} \end{array} \right\} \rightarrow \text{kjw-, khjw-, ngjw-, } \bullet \text{jw-, xjw-}$

*gw- $\left\{ \begin{array}{l} \text{I・II・IV等} \\ \text{III等(-j)} \\ \text{III等(-ji)} \end{array} \right\} \rightarrow \text{yw- (匣母合口)}$
 $\left\{ \begin{array}{l} \text{III等(-j)} \\ \text{III等(-ji)} \end{array} \right\} \rightarrow \text{jw- (喻}_3\text{母, 合口の場合が多い)}$
 $\left\{ \begin{array}{l} \text{III等(-ji)} \end{array} \right\} \rightarrow \text{gjw- (群母合口)}$

*hngw- $\left\{ \begin{array}{l} \text{ngw- (疑母合口)} \\ \text{xw- (曉母合口)} \end{array} \right.$

ほかに1音を含む複声母として次のようなものを再構している。

*ml->l-, *gl->l-, *kl->k-, *bl->l-

*pl->p-, *ngl->ng-, *ngl->l-

李方桂の上古韻の再構は次の通りである。要領は(4)と同様である。

上古韻分部 (I)	(II)	(III)	(IV)
之: 陰……………æg(, 灰, 侯)	ræg(皆)	jæg(之, 尤), jiæg(脂)	
入……………æk(德)	ræk(麥)	jæk, jiæk(職, 屋 ₃)	
蒸……………æng(登, 東 ₁)	ræng(耕)	jæng, jiæng(蒸, 東 ₃)	
之: 陰……………æg ^w (豪, 侯)	ræg ^w (肴)	jæg ^w (尤), jiæg ^w (幽, 脂 _B 合)	iæg ^w (蕭)
幽: 入……………æk ^w (沃)	ræk ^w (覺)	jæk ^w (屋 ₃ , 職)	iæk ^w (錫)
中……………æng ^w (冬)	ræng ^w (江)	jæng ^w (東 ₃)	
幽: 陰……………æg ^w (豪)	rag ^w (肴)	jag ^w (宵 _B), jiag ^w (宵 _A)	iag ^w (蕭)
宵: 入……………æk ^w (沃, 鐸, 屋 ₁)	rak ^w (覺)	jak ^w (藥)	iak ^w (錫)
侯: 陰……………ug(侯)		jug(虞)	
入……………uk(屋 ₁)	ruk(覺)	juk(燭)	
東……………ung(東 ₁)	rung(江)	jung(鍾)	
之: 陰……………æg(模)	rag(麻 ₂)	jag(魚, 虞), jiag(麻 ₃)	
魚: 入……………æk(鐸)	rak(陌 ₂)	jak(藥), jiak(陌 ₃ , 昔)	

上古韻分部 (I)	(II)	(III)	(IV)
陽……………ang(唐)	rang(庚 ₂)	jang(陽), jiang (庚 ₃)	
佳: 陰……………	rig(佳)	jig(支 _A)	ig(齊)
入……………	rik(麥)	jik(昔)	ik(錫)
耕……………	ring(耕)	jing(清, 庚 ₃)	ing(青)
歌: 陰……………ar(歌), uar(戈)	rar(麻 ₂), ruar	jar(麻 ₃), jiar(支 _B), juar	
祭: 陰……………ad(泰), uad(灰)	rad(夬), riad(皆), ruad	jad(廢), jiad(祭), juad	iad(齊)
入……………at(曷), uat(末)	rat(轄), riat(黠), ruat	jat(月), jiat(薛), juat	iat(屑)
元……………an(寒), uan(桓)	ran(刪), rian(山), ruan	jan(元), jian(仙), juan	ian(先)
脂: 陰……………	rid(皆)	jid(脂 _A)	id(齊)
入……………	rit(黠)	jit(質 _A ・術, 櫛)	it(屑)
眞……………	rin(山)	jīn(真 _A ・諄, 臻)	in(先)
微: 陰……………əd(哈・灰), ər(戈)	rəd(皆)	jəd(微), jīəd(脂 ₃), jər(支 _B)	iəd(齊)
入……………ət(沒)	rət(黠)	jət, jiat(質 _B ・術, 迄・物)	iət(屑)
文……………ən(痕・魂)	rən(山)	jən(欣, 文), jiən(真 _B ・諄, 臻)	iən(先)
葉: 陰……………ab(泰)	rap(狎), riap(洽)	jab(祭 _B), jiab jap(業・乏, 業)	iab(齊) iap(帖)
入……………ap(盍)			
談……………am(談)	ram(銜), riam(咸)	jam(嚴・凡), jiam(鹽)	iam(添)
緝: 陰……………əb(灰)	rəb(皆)	jəb(脂 _B 合), jiəb(脂 _B)	
入……………əp(合)	rəp(洽)	jəp(緝), jiəp(業)	iəp(帖)
侵……………əm(覃, 東 ₁)	rəm(咸)	jəm(侵, 東 ₃), jiəm(鹽)	iəm(添)

李方桂の上古韻部の主母音の区分は大きく言えば, Karlgren や董同龢と同じである。歌祭元部・葉談部・魚陽部・宵部が広, 微文部・之蒸部・幽中部・緝侵部が半広狭, 脂真部・佳耕部・侯東部が狭である。特徴的なことは, 宵部・幽中部に円唇化韻尾-gw, -kw, -ngw を設けたことである。それ

で、侯東部・幽中部・宵部について、従来のように現実には考えられないような微細な区別を奥舌の母音に設けなくともすむようになった。これは頼惟勤の「上古中国語の喉頭韻尾について」⁽¹⁾の影響であろう。

広・半にそれぞれ主母音-a-と-a-を設けている。狭の主母音は、それまで Karlgren や董同穌は-e-と-u-にしていたが、李方桂は脂真部・佳耕部に-i-、東侵部に-u-を設けている。したがって李方桂の上古音の母音の体系は次のようである。

i	u
	ə
	a

従来にくらべて、ずっとすっきりした母音体系である。

李方桂は、上古合口介音は存在しなかったとしたが、実際には必ずしも十分に説明されているとは思われない。東侯部に主母音-u-を設けたことについては、本来主母音は-i-であったが、唇音化韻尾-gw, -kw, -ngw の影響で-u-に後に変化したと、李方桂の述べる通り解釈できるとする。しかし、歌祭元部の舌歯音系声母に開合口の二系列があり、これをどのように処理するか注目された。李方桂は結局二重母音-ua-を設けている。これについては、-a->-ua-の分裂が起きた、つまり後世の変化だとしているが、それ以上何も述べていないので、筆者は必ずしも十分に納得できないものを感じる⁽¹⁾。

声調については、一応四声の存在を認めている。上古の漢語はCVC型だとして、陰声韻尾にすべて有声子音を認めている。

Haudricourt 等が言う-s 式の接尾辞 (Suffix) の存在は⁽¹²⁾、詩経以前に存在した可能性は認めるものの、一応はしりぞけている。

李方桂の「上古音研究」は、60年代までの議論の成果を集めたものであるが、70年代以降の議論の起点ともなっている⁽¹³⁾。

(1) Harvard Journal of Asiatic Studies 8

- (2) 1960, Problemy Vostokovedeniya 6, 漢語訳『漢語史論集』(唐作藩, 胡双宝選編 北京大学出版社, 1986) 所収。
- (3) 但し, 董同龢もこのことには気付いていたようで, 「上古音韻表稿」P89に「凡上古有舌根韻尾的韻部, 如分開合, 合口韻總是只有唇牙喉音字而無舌齒音字」と述べている。
- (4) Pulleyblank も牙喉音に k-系 (Velars) と kw-系 (Labiovelars) の二系列を設けている。“The consonant system of old Chinese”, Asia Major 9 1962, P 95。
- (5) 中古音の Labiovelar について指摘したものに, 王静如「論開合口」(1941, 燕京学報29) がある。
- (6) 1960, Paper presented at the 25th International Congress of Orientalists, 前掲『漢語史論集』所収。
- (7) r 介母については, 李方桂「上古音研究中声韻結合的方法」(語言研究1983年2期), 大島正二「上古漢語の一・二等韻について」(1972, 『現代言語学』三省堂) が参考となる。また Pulleyblank も前掲論文 P110で介母-rを主張している。
- (8) 1976, 『總統蔣公逝世週年紀念論文集』, また本書 P85~94に再録されている。なお, 正齒音Ⅲ等 ts-系と牙喉音との関係について口蓋化を指摘するのは, 河野六郎「中国音韻史研究の一方向——第一口蓋音化に關聯して——」(1950, 『河野六郎著作集2』所収) や, Pulleyblank 前掲論文 P105等にも見える。
- (9) 李方桂は *sk->ts-等の再構は訂正したが, *st->s-, *sk->s-等の再構は改めて強調している。その中には, 諧声系列から見てその理由を理解しかねる字例もある。接頭辞 (prefix) s-は Conrady や Maspero の研究あたりから始まるらしい。李方桂もチベット語についてであるが, “Certain phonetic influences of the Tibetan prefixes upon the root initials” (1933, 中央研究院歴史語言研究所集刊4-2) で prefix の s-について, 早にとりあげている。最近刊行された Bodman の『原始漢語与漢藏語』(1995, 中華書局) の漢訳本自序によれば, Bodman 自身の論文 “Some Chinese reflexes of Sino-Tibetan S-clusters” Journal of Chinese linguistics, 1-3, 1973等が, 李方桂のこのような再構に影響を与えているとする。
- (10) 1953, 『中国音韻論集, 賴惟勤著作集 I』所収
- (11) 李方桂は後に「論開合口」(1984, 中央研究院歴史語言研究所集刊56-1)を出している。
- (12) “Comment Reconstruire le Chinois Archaïque” Word, 10 (1954), 漢語訳「怎樣擬測上古漢語」(『中国語言学論集』, 1977, 幼獅出版社) 等。
- (13) 『中国境内語言暨語言学第一輯』(1992, 中央研究院歴史語言研究所) 所収の「上古音対談録」に, 李方桂の上古音再構について, 梅祖麟と龔煌城の興味深い対話があり, 参考となる。

(補) 梅祖麟, Coblin, Pulleyblank, Baxter 等の学説については, また稿を改めたい。

(ふくみつ・まさひろ 明治大学助教授)